様　式　Ｆ－１９－２

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２７ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(A)）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９ＫＫ０３０９

研究課題名（和文）子どもの社会的な心の国際比較に関する発達心理学的研究

研究課題名（英文）Developmental psychological study about children's social cognition

研究代表者
林　創（Hayashi, Hajimu）

神戸大学・人間発達環境学研究科・教授

研究者番号：８０４３７１７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,000,000円
渡航期間：　10ヶ月

研究成果の概要（和文）：私たちは，自分の印象を操作する自己呈示を頻繁に行っている。国際共同研究の結果，自己呈示者に対する能力と性格の評価は，児童期に大きな変化があり，自己呈示者のふだんの実力（得意or苦手）が両者の評価に影響した。とくに，ふだん苦手な状況において，7～8歳頃を過ぎると，他者が自己高揚をしたときの方が自己卑下をしたときより，その人の性格を低く評価する様子が顕著になった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では，自分の本当の能力を偽って表出するという意味で，状況に応じた嘘の一つとも考えられる「自己呈示」の理解の発達について検討した点に，学術的意義があると考えられる。さらに，何かを上手く行って他者から褒められることは日常的によくあり，このとき，ふだんの自分の実力がどの程度であるかをふまえて自己呈示を行わないと，相手が抱く印象が大きく変わりうること，そのような変化は10歳頃までに顕著に見られることが明らかになった。これは教育的にも重要な知見であり，社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Self-presentation is common in our daily life. The results of the joint international research showed that the evaluation of the ability and the character of the self-presenter changed significantly during childhood, and that the self-presenter's usual performance (good or poor) affected the evaluations of both. In the case in which the self-presenter's performance was usually poor, after the age of 7-8 years, it became more noticeable that the participants evaluated the self-presenter's character less nice when the self-presentation was self-enhancement than when it was self-deprecation.

研究分野：発達心理学

キーワード：社会性　自己呈示

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｆ－１９－２

１．研究開始当初の背景

人間の大きな特徴の一つは「社会性」にあると言われる。ここで社会性と一口に言っても，その範囲は多様である。たとえば，身振りや言語の発達は，他者とコミュニケーションを取る上で欠かせない。乳幼児期における養育者との安定したアタッチメントも他者との良好な社会性を高めるうえで重要である。このように，社会性の発達に迫るには多くの切り口が考えられるが，本国際共同研究では，社会的認知の側面に焦点を当て，心の理論をバックボーンとした他者理解に着目した。発達心理学の多くの研究から，人間は，幼児期から児童期に心の理論を身につける事実が知られている。心の理論の獲得によって他者とのかかわりが劇的に変化するため，心の理論は社会性の発達に不可欠である。とくに，児童期になると，他者とかかわる際に，場や相手との関係によって判断や行動を変えることができるようになる。それゆえ，文脈を読み取って柔軟に反応を変えることで，状況に応じた嘘や道徳判断が可能になる。そこで，本研究では，自分の本当の能力を偽って表出するという意味で，状況に応じた嘘の一つとも考えられる「自己呈示（self-presentation）」に焦点を当て，児童期の子どもを対象に，イギリスの研究者と国際共同研究を行った。

２．研究の目的

これまでの発達心理学の研究から，主として児童期に，自己呈示に対する評価や理解が進むことが明らかになっている。たとえば，「何かをよくできたり，うまく行ったりした（例：速く走った，絵を上手に描いた）主人公が，相手から「すごいね！」や「うまいね！」などと褒められた後，自己高揚（self-enhancement）的反応，もしくは，自己卑下（self-deprecation）的反応をする」というお話を子どもに提示して，（相手から見た） 主人公の能力や性格（良い人か悪い人か）などを評価してもらう，といった方法がとられてきた。しかしながら，これまでの研究では，主人公のふだんの実力 (例：走るのが得意／走るのが苦手) の情報は与えられず，不明であった。私たちは，ふだんの行動や実力，性格などをもとに，他者に対する評価や判断を行っている。したがって，自己呈示においても，たとえある場面でよくできたとしても，ふだん得意な場合と苦手な場合では，自己呈示に対する評価が異なることが考えられる。

たとえば，主人公がかけっこで速く走って 1 位になり，相手から褒められた後，主人公が自己卑下的な発話（「たまたまだよ」）をしたとしよう。この時，ふだん走るのが苦手な主人公が，思いがけず 1 位になったのであれば，その発言は「真実（truth）」である。したがって，自己卑下的反応に対して，誠実な感じがするなど良い印象を持つであろう。一方，ふだん走るのが得意な主人公が，いつも通り 1 位になった場合は，その発言は「虚偽（falsehood）」といえる。それゆえ，偽りの謙遜の感じがするなど，少し不快な印象を受けることもありえよう。これと同様に，速く走って 1 位になり，相手から褒められた主人公が，今度は自己高揚的な発話 （「うん，走るのが得意だからね」）をしたとしよう。この時，ふだん走るのが得意で，いつも通り 1 位になったのであれば，その発言は「真実」である。しかし，発言が自慢げに感じて良い印象を持たない可能性があるだろう。一方，ふだんは走るのが苦手な主人公が，たまたま 1 位になったのであれば，その発言は明らかな「虚偽」である。したがって，相手はネガティブな印象を持つのが一般的であろう。

これらをふまえて，本研究では，自己呈示に対する評価が，自己呈示者のふだんの実力によって，年齢とともにどのように変化するかを検討した。

３．研究の方法

参加者

小学 2 年生 60 名，小学 5 年生 61 名，大人 63 名であった。

課題と手続き

4 つのシナリオによる 4 場面を用意した。各シナリオは，同じ構造を持つ 2 つのお話で構成されていた。各場面の一方のお話では，主人公が何かをする（例：走る）のがふだん得意で，ある日も同様に良い結果になった（例：運動会の日も速く走り，1 位になった）。もう一方のお話では，主人公がふだんは苦手であるが，ある日は思いがけず良い結果になった。その後は共通で，相手が「すごいね！」と褒めたところ，主人公は「得意だからね（得意なのよ）」という自己高揚的反応，もしくは，「たまたまだよ（たまたまよ）」という自己卑下的反応をした。4 つの場面のうち 2 つでは主人公が自己高揚的反応をした。残りの 2 つでは主人公が自己卑下的反応をした（各反応の 2 場面で，主人公と相手の性別を入れ替えた）。

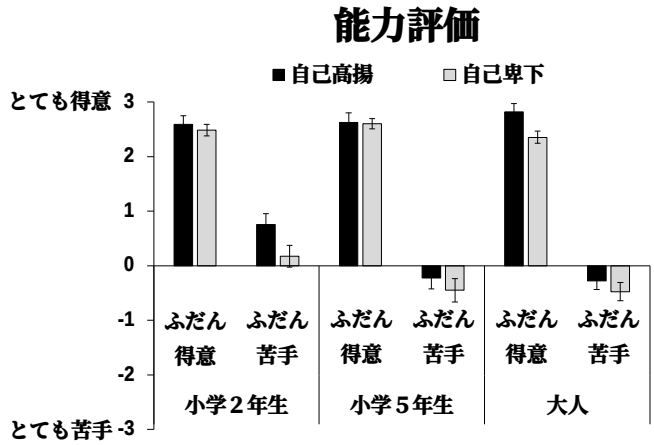
各場面で事実確認の質問をした後，2 つのお話それぞれについて，能力評価と性格評価をしてもらった。

能力評価：（例：お話①で，…さん（くん）は，…くん（さん）のことを，どれくらい…するのが得意だと思うでしょうか，それとも苦手だと思うでしょうか？）を，7 段階（3：とても得

意，2：まあまあ得意，1：少し得意，0：どちらでもない，-1：少し苦手，-2：まあまあ苦手，-3：とても苦手）で回答してもらった
「性格評価」：（例：お話①で，…さん（くん）は，…くん（さん）のことを，どれくらい良い人だと思うでしょうか，それとも，悪い人だと思うでしょうか？）を，7 段階（3：とても良い，2：まあまあ良い，1：少し良い，0：どちらでもない，-1：少し悪い，-2：まあまあ悪い，-3：とても悪い）で回答してもらった。

４．研究成果

事実確認の質問に誤答した 6 名のデータを除外して分析した。



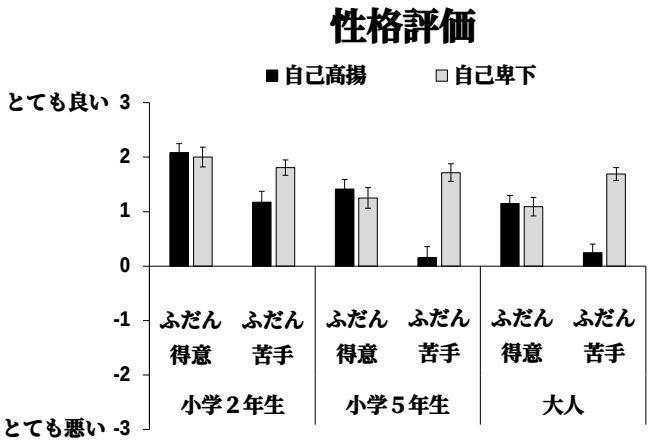


Figure 1 能力評価と性格評価の結果

能力評価質問

ふだん得意という状況では，大人のみ，自己卑下の方が自己高揚よりも能力に対する評価が低くなった。このことから，ふだん得意で，いつも通りよくできたのに自己卑下する（謙遜する）と，大人に対して能力が低く見えてしまうことが明らかになった。一方，ふだん苦手という状況では，小学 2 年生のみ，自己高揚の方が自己卑下よりも能力に対する評価が高くなった。したがって，ふだん苦手なのに，思いがけずよくできて自己高揚すると，低年齢の子どもに対しては，自分の能力をより高く見せられることが示唆された。

性格評価

ふだん得意という状況では，小学 2 年生は，全体的に小学 5 年生や大人より，主人公の性格を好意的に評価したものの，どの年齢でも自己高揚と自己卑下の間に差がなかった。それゆえ，ふだんは得意で，いつも通りよくできたのに自己卑下（謙遜）しても，自分をより良い人に見せる効果はないということになる。一方，ふだん苦手という状況では，どの年齢層でも自己高揚が自己卑下よりも評価が低く，その差は小学 2 年生から 5 年生にかけて顕著に大きくなった。自己卑下では年齢による変化がなかったため，この差は自己高揚の評価の大きな低下によるものだった。この結果は，ふだん苦手なのに，思いがけずうまくいって自己高揚することは，とくに年長

の子どもや大人に対して，自分が良い人でないように見えてしまうことを意味する。
　ただし，全体的には，2 年生はどちらの評価でも，それ以降の年齢と比較してポジティブな評価であった。また，各年齢層の自己高揚と自己卑下の両方で，性格評価の平均値が 0（中立）以下ではなかった。すなわち，思いがけず上手くいって自己高揚するという虚偽の場合も，その人が悪い人だとまでは判断しない傾向が明らかになった。

　このように，国際共同研究の結果，自己呈示者に対する能力と性格の評価は，児童期に大きな変化があり，自己呈示者のふだんの実力（得意 or 苦手）が両者の評価に影響することが明らかになった。この知見について，心の理論の枠組みや，東洋と西洋の文化差の知見を踏まえて，多面的に考察したうえで成果をまとめた国際共著論文が，発達心理学の国際学術雑誌（*Journal of experimental child psychology*）に掲載（Hayashi, H., Matsumoto, A., Wada, T. & Banerjee, R. (2024). Children’s and adults’ evaluations of self-enhancement and self-deprecation depend on the usual performance of the self-presenter. *Journal of Experimental Child Psychology*, *242*, 105886.）された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Hayashi Hajimu、Matsumoto Ayumi、Wada Tamano、Banerjee Robin	４．巻 242
２．論文標題 Children’s and adults’ evaluations of self-enhancement and self-deprecation depend on the usual performance of the self-presenter	５．発行年 2024年
３．雑誌名 Journal of Experimental Child Psychology	６．最初と最後の頁 105886～105886
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.jecp.2024.105886	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Hayashi Hajimu、Mizuta Nanaka	４．巻 215
２．論文標題 Omission bias in children’s and adults’ moral judgments of lies	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Journal of Experimental Child Psychology	６．最初と最後の頁 105320～105320
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.jecp.2021.105320	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Hayashi Hajimu、Ban Yoshimi	４．巻 18
２．論文標題 Children’s understanding of unintended irony and unsuccessful irony	５．発行年 2021年
３．雑誌名 European Journal of Developmental Psychology	６．最初と最後の頁 230～256
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/17405629.2020.1783528	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 藪田小百合・林 創	４．巻 14
２．論文標題 自己と他者の関係に着目した幼児の自己調整機能の発達	５．発行年 2021年
３．雑誌名 神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要	６．最初と最後の頁 147-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 林　創・沖野資也
２．発表標題 分配に対する考え方が生み出す好感度の差異
３．学会等名 日本心理学会第85回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Hayashi, H.
２．発表標題 Young children attempt to appear fair to others in resource distribution
３．学会等名 BPS Cognitive Psychology Section & Developmental Psychology Section Joint Conference 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 林　創・伴佳美
２．発表標題 子どもにおける意図と解釈に違いがある皮肉の理解
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

１．著者名 長谷川真里・佐久間路子・林 創	４．発行年 2024年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 223
３．書名 社会性の発達心理学	

1．著者名 リチャード・M・ラーナー他 二宮克美・子安増生（監訳） 河合優年・服部環・郷式徹・山祐嗣・小塩真司・仲真紀子・根ケ山光一・氏家達夫（編訳） 林 創 他 計117人訳	4．発行年 2022年
2．出版社 福村出版	5．総ページ数 6068
3．書名 児童心理学・発達科学ハンドブック	

1．著者名 糸井尚子・上淵寿（編著）・利根川明子・柏崎秀子・林 創・近藤龍彰・中野貴博・坂本美紀・伊藤貴昭・仲真紀子・篠ヶ谷圭太・富田英司・藤野博・奥野誠一	4．発行年 2020年
2．出版社 学文社	5．総ページ数 189
3．書名 教育心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
	バナジー　ロビン (Banerjee Robin)	サセックス大学・School of Psychology・Professor	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関

英国	サセックス大学			